

辨天の同情

京都に名高い大通寺と云ふ寺があつた。清和天皇の第五の皇子貞純親王が僧として、その一生の大部分をそこで送らせ給うた、それから多くの名高い人々の墓がその境内に見出される。

しかし現在の建物は昔の寺ではない。もとの寺は千年もたつてから、大破に及んだので、元祿十四年（西曆一七〇一年）に全部改築される事になつた。

その改築の祝ひに大佛事が行はれた、その佛事に參詣した數千の人々のうちに學者で詩人の花垣梅秀と云ふ若い人がゐた。彼は新しく造られた庭園など廻りあるいて、何でも喜んで見て居るうちに、以前屢々飲んだ事のある泉に到着した。彼はその時、泉の廻りの土地は掘りかへされて、四角な池になつて居る事、それから池の一端に木の札を立てて『誕生水』と書いてある事を見て驚いた。それから又小さいが甚だ立派な辨天の社が池の側に建ててある事を見た。彼がこの新しい社を眺めて居るうちに、不意に一陣の風が彼の足もとに一枚の短冊を吹き寄せた、その上にはつぎの歌が書いてあつた、――

しるしあれと

いはひぞぞむる玉箒

とる手ばかりの

ちぎりなれども

この歌——名高い俊成卿の作つた初戀の歌——は彼に取つては珍らしくはなかつた、しかしそれは女の手で、しかもそんなに巧みに短冊に書いてあつたので、彼は殆んど夢かとはかり驚いたのであつた。文字の形にある或物、——何とも云へない優美、——はこどもとおとなの間の若い時を暗示してゐた、それから墨の清い立派な色は書いた人の心の清さと善良な事を表はして居るやうであつた。

梅秀は丁寧に短冊を疊んで、家にもつて歸つた。見れば見る程、始めよりも一層立派に見えた。書道に關する彼の知識から判断すれば、この歌は、甚だ若い、甚だ賢い、そして多分甚だ心の素直な少女の書いた物に相違なかつた。しかしこの判断は、彼の心に甚だ綺麗な人の面影を作るに充分であつた、そして彼は見ぬ戀にあこがれる事になつた。それから、彼の第一の決心は、その歌の筆者をさがしてできる事ならその人を妻に娶る事であつた。……しかしどうしてその女を見出す事ができよう。その女は何者だらう。どこに居るのだらう。彼女をさがす事のできる望みはただ神佛の加護によるより外はなかつた。

しかし、神佛も喜んで加護を垂れ給ふ事が、そのうちに彼の心に浮んで來た。この短冊は彼が

辨天様の堂の前に立つて居る間に、彼のところへ来たのであつた、そして戀人同志が幸福なる結合を得ようとしていつも參詣するのはこの神様であつた。さう考へたので、この神様にお助けを願ふ事にした。彼は直ちに、寺の境内の誕生水の辨天の堂へ參詣して、眞心をこめて、こんなお祈をした、——『辨天様、お願です、——この短冊を書いた若い人はどこに居るか、見出せるやうにお助けを願ひます、——たとへ僅かの間でも、——彼女に會ふただ一度の機會でも私に與へて下さい』それから、この祈をしたあとで、彼は辨天様に七日參りを始めた、同時に終夜參籠して禮拜のうち、第七夜を過ぎると誓つた。

さて第七夜に、——彼の夜明しをした時、——静かさの最も深い時に、彼は寺の總門に聲があつて案内を呼んで居るのを聞いた。内部から別の聲が答へた、門は開いた、そして梅秀は立派な風采の老人が徐々たる步調で近づいて來るのを見た。この老いて尊い人は水干に指貫を着て、雲のやうな頭に烏帽子を冠つてゐた。辨天の堂について、彼はその前に跪いて何か命令を待つて居るやうであつた。それから宮の外側の扉が開いた、そのうしろの内部の神殿を隠してゐた簾は半ば巻き上つた。それから一人の稚兒——昔風に長い髪を束ねた綺麗な男の子——が現れた。彼はそこに立つて澄み渡つた大きな聲で老人に云つた、——

『ここに、その現在の境遇に不相應な、そして外の方法では達せられさうにない事を祈つて居る者がある。しかしその若者は不便に思ふから、何とかしてやる方法はないか、それで御身は召さ

れたのである。宿世の縁もあるやうなら宜しく兩方を引合せて貰ひたい』

この命令を受けて、老人は恭しく稚兒に敬禮してから、立ち上つて、左の長い袖の袂から赤い紐を取り出した。この紐の一端で梅秀の體を縛るやうに巻いた。他端を御灯ごとうの火に燃した、その紐が燃えて居る間に、彼は暗がりから誰かを呼ぶやうに、三度手で招いた。

直ちに寺の方向に來る足音が聞えて來た、そしてすぐに一人の少女が現れた、——美しい十六七歳の少女であつた。彼女ははしとやかに、しかし甚だはにかんで、——扇で口のあたりを隠しながら近づいた、そして彼女は梅秀の側に坐つた。それから稚兒は梅秀に向つて云つた、——

『この頃御身は甚だ心を痛めて、及ばぬ戀に身を苦しめてゐた。そのやうな不幸をそのままに見捨て置く事もできないので、月下の翁を招いて短冊のぬしに引合せる事にした。その人は今御身の側に來て居る』

かう云つて稚兒は簾のうしろに退いた。それから老人は來た時と同じやうに歸つた、そして少女もそのあとに續いた。同時に梅秀は曉を知らせる寺の大梵鐘を聞いた。彼は誕生水の辨天堂の前に感謝のために平伏した、それから——楽しい夢からさめた心地で、——彼がそれ程會ひたいと熱心に祈つた美しい人を見る事ができたのを喜びながら、——又再び會ふ事ができないのではないかと考へて心配もしながら、歸途についた。

しかし門から往來へ出るや否や、彼は自分と同じ方向に獨りで行く少女を見た、そして曉のほの暗きうちにも、彼は直ちに辨天堂で引合はされた人である事を認めた。彼女は追ひつかうとし

て歩を早めた時、彼女はふり向いて、しとやかなお辭儀をして彼に挨拶した。その時彼は始めて彼女に話しかけてみた、そこで彼女は彼に返事をしたが、その聲の美はしさで彼の心は喜びで満たされた、未だ静かな往來を彼等は樂しさうに話しながら歩いて、遂に梅秀が住宅まで来た。そこで彼は止つて——少女に自分の望みと恐れとを語つた。微笑しながら、彼女は尋ねた、——『私あなたの妻になるために呼びよせられた事を御存じないのですか』それから彼女は彼と一緒に入つた。

彼の妻になつてから、彼女はやさしい智慧と情けで、思ひの外に彼を喜ばせてくれた。その上、彼は自分の想像以上に、彼女の遙かに教養のある事を發見した。それ程手蹟の立派である以外に、美しい繪を描く事ができた、生花、刺繍、音樂の諸藝に通じてゐた、織る事も縫ふ事もできた、それから家事に關する一切の事を知つてゐた。

この若い二人が會つたのは秋の初めであつた、そして彼等は冬の季節の始まるまで仲睦まじく暮らしてゐた。この三月の間、彼等の平和を亂す何物もなかつた。このやさしい妻に對する梅秀の愛は、時と共にただ強くなるばかりであつた。しかも、不思議にも、彼は彼女の經歷を知らなかつた、——彼女の家族についても少しも知らなかつた。こんな事については彼女は決して云はなかつた、そして神佛から授かつたから、彼女に問ふのは不適當であると想像した。しかし、月

下の翁もその外の者も——彼が恐れてゐたやうに——彼女を取り返しには來なかつた。何人も彼女に關して問合す事もしなかつた。それから隣人達は、どう云ふわけか分らないが、彼女の存在を全然知らないかのやうにしてゐた。

梅秀は凡てこんな事を不思議に思つた。しかしもつと不思議な經驗は彼を待つてゐた。

或多の朝、彼は京都のやや邊鄙な場所を通つて居る時、大聲で自分の名を呼ぶ人を聞いた。見ると或人の家の門から一人の下男が彼に向つて手招きをしてゐた。梅秀はその男を知らない、それに京都のこの邊で知人は一人もないから、彼に取つてはそんな突然の招きは驚き以上であつた。しかし下男は、進んで來て、最上の敬意を表して、彼に挨拶して、云つた、『主人はあなたにお目にかかりたいと申して居ります、どうぞ暫らくお入り下さい』少しためらつたあとで、梅秀は案内されるままにその家へ入つた。家の主人らしい立派な身なりの威嚴のある人が、玄關へ出て彼を歓迎して、それから客間へ案内した。初對面の挨拶が交換されたあとで、主人は彼をこんなに突然招いた事の無禮の云ひわけをして、云つた、——

『こんな風にお呼び申したのは實に無禮に思はれるに相違ありませんが、實は辨天様からのお告げによる事と固く信じてこんな事をいたしました次第で、多分御容赦下さる事と存じます。これからお話いたします。』

『私、娘を一人もつて居りますが、十七ばかりになります、手も相應に書きます、その外の事も一通りいたします、人並の女でございます。どうか良い縁をもとめて幸福にしてやりたいと思つ

て辨天様にお祈を致しました、それから京都の辨天堂へ悉く娘の書いた短冊を奉納いたしました。それから幾晩かあとで、辨天様が夢に現れてお告げがありました、「祈は聞いたから、お前の娘の夫になる人に娘をもう引合せて置いた。冬になればその人は来る」紹介が済んだと云ふこの證言が分らなかつたから、私は少し疑ひました、私はこの夢は意味のない普通の夢に過ぎないのだらうと思ひました。しかし昨夜又私は夢に辨天様を見ました、そしてそのお告げに「明日、さきに云つて置いた若い人がこの町へ来る、その時うちへ招じ入れて娘の婿になつてくれるやうに云ふ方がよい。良い青年だから、後には今よりはずつと高い位に上るやうになる」とありました。それから辨天様はお名前、年齢、生れ所をお聞かせになつて、容貌や着物を詳しく云つて下さいましたので、私が申しきかせた指圖で、下男は造作なくあなたが分りました。』

この説明は、梅秀を納得させないで當惑させるばかりであつた、彼はただその家の主人が彼に敬意を表する事を云つた事に對する形式的返禮の言葉しか云へなかつた。しかし主人が娘に紹介するつもりで別室へ彼を誘つた時、彼の當惑は極度に達した。それでも彼はその紹介を程よく謝絶する事はできなかつた。彼はこんな異常な場合に自分にはすでに妻がある事、——正しく辨天様から授かつた妻、彼が別れる事などは考へて見る事もできない妻のある事を云ひ出すわけには行かなかつた。そこで黙つてびくびくしながら、その示された部屋へ主人のあとからついて行つた。

その家の娘に紹介された時、その娘と云ふのは實は彼がすでに妻として居るその人と同じ人である事を發見した時の彼の驚きは、どんなであつたらう。

同じ、——しかし同じではない。

月下翁によつて紹介された彼女はただ愛人の魂であつた。
今、父の家で結婚する事になつた彼女は體であつた。

辨天はその信者のためにこの奇蹟を行つたのであつた。

*
*
*

もとの話は色々の事を説明をしないままにして、突然終つて居る。その結末は餘程感心しない。本當の乙女が自分の靈の結婚生活の間にどんな精神上の經驗をしたかについて、讀者は多少知りたい。それからその靈がどうなつたか、——それは續いて獨立の存在をしたかどうか、或はそれが夫の歸りを辛抱して待つてゐたかどうか、或はそれが本當の花嫁のところへ訪問に來たかどうかを讀者は知りたい。そして書物にはこれ等の事については何も云つてない。しかし日本の友人はこの奇蹟をこんな風に説明する、——

『魂の花嫁は實際短冊からできたのであつた。それで本當の少女は辨天堂での會合については少

しも知らないと言ふ事はあり得べき事である。短冊の上にその美しい文字を書いた時に、彼女の魂の幾分はそこへ移つた。それだから書いた物から、書いた人の精靈を呼び起す事ができたのであつた』

(田部隆次譯)
The Sympathy of Benem. (Shadowings.)